

**平成20-22年度 日本学術振興会 科学研究費補助金
基盤研究(C) 「早期英語教育教材に見る語彙と文法
の特徴：真に『英語が使える日本人』育成に向け
て」 研究代表者 神谷昇 2010年度 研究概要**

雑誌名	Scientific approaches to language
巻	10
ページ	149-150
発行年	2011-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000684/

平成 20-22 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

「早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に『英語が使える日本人』育成に向けて」

研究代表者 神谷昇

2010 年度 研究概要

本科研プロジェクトは、早期英語教育教材に使用される語彙および文法項目について英語学・言語学・英語教育学の観点から記述的調査や理論的研究を行い、その結果に基づき早期英語教育に対する示唆を提供することを目的とする 3 年間の研究プロジェクトである。

本研究プロジェクトの最終年にあたる 2010 年度は、これまでの研究の総括として、日本英語学会第 28 回大会（於日本大学文理学部キャンパス）にてワークショップ「英語学から見た児童英語」を企画し、本研究プロジェクトの研究メンバーである長谷部郁子、町田なほみ、神谷昇、長谷川信子が発表を行った。そして、長谷部は、児童英語教育教材の中に出現する英文のうち、児童が自ら発する文には活動動詞や状態動詞など、ACT や STATE のみの単一ユニットから成る LCS や単一の VP のみから成る統語構造といった、単純な構造を含む動詞が非常に多く現れることを指摘した。また、町田は児童英語教育教材に出現する機能語を分析し、特に前置詞についてはプロトタイプの用例が多いことを示した。神谷は児童英語教育教材の中で児童が使用することを期待されている英文の「構文」（いわゆる「文法項目」）を調査し、非常に限られた種類の「構文」が使用されていることを提示した。最後に長谷川は小学校英語活動教材から観察された小学校英語の特性を、(a)第 2 言語習得・教育分野で近年広く想定されているタスクの観点からの「言語能力」の考え方（その具体例としてのヨーロッパ共通参照枠（CEFR））および、(b)「ヒトの言語としての体系」の観点から、どの程度、どう「限られ

たもの」であるかを明らかにした。なお、ワークショップの要旨は 2011 年 3 月に日本英語学会から発行された *Proceedings of JELS 28* に掲載されているので、参照されたい。

また、本研究プロジェクトのメンバーは「JACET 小学校語彙プロジェクト」にも参加し、そこでの研究成果の一環として、「JACET 英語語彙研究会第 7 回大会(語彙研究フォーラム 2010)&第 12 回 JACET 英語辞書研究会主催ワークショップ(年次大会)」(2010 年 12 月 11 日、於早稲田大学)において神谷、長谷部、ならびに仁科恭徳(立命館大学)、平田恵理(福岡女学院大学)が「児童英語教育における定型表現:『英語ノート』と国内児童英語教育用教材との比較を中心に」というタイトルで研究発表を行い、主に『英語ノート』に出現する「定型表現」(常に一定の形式で使用される表現)の調査結果を報告した。